

ガラテヤの信徒への手紙（概要）

2019 年 7 月 24 日

古本 靖久

1、聖歌 535 番 「あなうれし わが身も」

2、お祈り

3、今日の内容

今回からガラテヤの信徒への手紙について、学んでいきます。新約聖書には福音書のほかにも、様々な文書があります。しかし主日礼拝の説教ではなかなか取り上げられません。今回の学びを通して、なぜそのような手紙が聖書に収められているのか、考えることができたらと思います。

① 新約聖書について

新約聖書には 27 の文書が収められています。このタイトルを覚えさせられたことがありますが、それはともかく 27 の文書を次のように分類することができます。

- | | |
|------------------|--|
| A、福音書 | （マタイ福音書・マルコ福音書・ルカ福音書・ヨハネ福音書） |
| B、歴史書 | （使徒言行録） |
| C、 <u>書簡（手紙）</u> | |
| I. <u>パウロ書簡</u> | （ローマ、1 コリント、2 コリント、 <u>ガラテヤ</u> 、フィリピ、1 テサロニケ、フィレモン） |
| II. 疑似パウロ書簡 | （エフェソ、コロサイ、2 テサロニケ） |
| III. 牧会書簡 | （1 テモテ、2 テモテ、テトス） |
| IV. 公同書簡 | （ヤコブ、1 ペトロ、2 ペトロ、1 ヨハネ、2 ヨハネ、3 ヨハネ、ユダ） |
| D、黙示文学 | （ヨハネ黙示録） |

ここでまず、疑問を持たれた方もおられると思います。「疑似パウロ書簡」って何でしょう。これらはパウロが書いたとは考えにくい手紙で、「第二パウロ書簡」、「パウロの名による書簡」という呼び方もされます。「パウロから」と書くと、みんなちゃんと読んでくれるだろうという思いがあったのかもしれませんが。今日から学ぶ「ガラテヤの信徒への手紙」は間違いなくパウロが書いたものだと考えられています。

② 書かれた年代

下の表はマルコ福音書の学びのときにも登場したものです。先ほどのパウロが書いたか否かについても様々な議論がなされていますが、以下の年代についても諸説あります。大まかに見ると、以下のような年表が出来上がります。

年代（紀元後）	出来事	書かれた文書
30 年ごろ	イエス処刑される	
47 年ごろ	パウロ第 1 回伝道旅行	
49～52 年ごろ	パウロ第 2 回伝道旅行	1 テサロニケ
<u>53～56 年ごろ</u>	パウロ第 3 回伝道旅行	<u>ガラテヤ</u> 、フィリピ、フィレモン、1,2 コリント
59～60 年		ローマ
64 年	皇帝ネロの迫害	
66 年	第一次ユダヤ戦争	
70 年	エルサレム陥落	マルコ福音書（70 年前後）
80～90 年ごろ		マタイ・ルカ福音書
90 年代後半		ヨハネ福音書

ここで押さえておきたいのは、福音書が書かれる前にパウロ書簡と呼ばれる手紙は既に書かれていたということです。

聖書を開くと福音書からスタートするので、わたしたちは福音書の方が先に書かれたと考えがちです。しかし福音書は、一番早く成立したマルコ福音書でさえ、イエス様の死後 40 年位経ってからのものです。

ではなぜそのような時期に、手紙を書く必要があったのか。まずは手紙の著者であるパウロについてみていきましょう。

③ パウロという人物

パウロが最初に聖書に登場するのは、使徒言行録 7 章 58 節です。このときには「サウロ」という名前が出てきます。イエス様の弟子になってから、パウロは自らのそのような名で呼ぶようになります。

パウロというと初期キリスト教の偉大な指導者であり、キリスト教の土台を気づいた使徒であるとされます。それは間違いのないのですが、当初からイエス様に従っていたわけではありませんでした。

先ほどの使徒言行録 7 章 58 節は、「ステファノの殉教」という話の一部です。イエス様の死後、弟子に加わったステファノという人物が逮捕され、ユダヤの人たちに石を投げつけられて殺されたときに、サウロ（パウロ）は登場します。



使 7 : 58 証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。

証人（ユダヤ人）たちは石をステファノに投げつけながら、着ている物をサウロの足もとに置きます。しかしサウロは「やめろ！」とも言わず、ステファノを助けるわけでもなく、じっとしています。それには訳がありました。

使 8 : 1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。

イエス様の弟子であるステファノの殺害に、あのサウロが賛成していたなんて！なぜ！！そう思われるかもしれません。さらにこんな記述もあります。

使 8 : 3 一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。

なぜサウロはそのように教会やキリスト者を迫害していたのでしょうか。その理由が分かるこのような言葉があります。

フィリピ 3 : 5~6 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。

イエス様が活動していたころ、ファリサイ派の人たちや律法学者とは何度も衝突していました。彼らは非常に熱心でした。しかし神さまから与えられた律法を守ることを大事にする があまり、律法を守ることのできない人たちを「罪人(つみびと)」として排除していきました。

しかしイエス様は、それらの人たちに手を差し伸べ、共に食事をします。自分たちこそ正しいと思っていた彼らにとって、イエス様の教えは「迫害に値するもの」だったのです。

③ パウロの回心

そんな「迫害者サウロ」に、転機が訪れました。それが使徒言行録 9 章 1～19 節にある「サウロの回心」です。この出来事を簡単にまとめます。

サウロ、大祭司にダマスコの諸会堂あての手紙を求める。

(キリスト者を見つけたら縛り上げ、エルサレムに連行するため)

↓

サウロがダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らす。

↓

サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。

↓

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

これから、サウロの目は見えなくなります。人々の手に引かれ、彼はダマスコに連れて行かれますが、三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかったそうです。

さて、ダマスコにはアナニア（神は情け深いという意味）というキリストの弟子がいました。主は彼に、サウロの上に手を置くように命じます。しかしアナニアは、サウロがエルサレムでキリスト者を迫害していたことを知っていました。アナニアに主は言われます。

使 9 : 15 行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。



アナニアはサウロの元に行き、サウロは元どおり目が見えるようになります。このとき「目からうろこのようなものが落ち」と聖書は伝えます。「目からうろこ」という言葉は、ここから生まれています。

サウロはここで洗礼を受けます。そして 180 度向きを変え、これまで迫害していたキリストを伝えるために生涯をささげていくのです。

④ パウロの宣教旅行

使徒言行録によると、パウロは三度の宣教旅行をし、その後ローマへと向かいます。その途上で、彼は各地に教会共同体を作っていきます。今のように移動が簡単にできるわけでもなく、電話やメールですぐに連絡が取れるわけでもありません。

パウロの宣教旅行の足取りは、別紙のようになっています。その中で福音を宣べ伝えることは、大変困難を伴うことだったと思います。しかしパウロは変えられていました。フィリピの信徒への手紙には、こう書いています。

フィリピ 3：7～8　しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。

その喜びを一人でも多くの人に伝えたい。それがパウロの願いでした。パウロに出会った人たちは、福音の喜びに包まれたことでしょう。

しかしパウロが第三回宣教旅行の際にガリラヤを訪れたあと、気になることがあったようです。そのことを伝えるために、この「ガリラヤの信徒への手紙」は書かれたのです。

<手紙の執筆場所>



⑤ パウロがガラテヤの信徒に伝えたかったこと

パウロの耳に、とても気になるニュースが飛び込んできました。それはパウロがガラテヤの教会を去ったあと、「ほかの福音」を伝える人たちが現れたということです。「ほかの福音」といっても、キリストを信じることに変わりはありません。

ではパウロが伝えた福音と、どう違ったのでしょうか。簡潔に言うと、「信じるだけではダメ」ということです。律法を守ったり、割礼を受けたり、ユダヤ教の暦を守ったり、その上でキリストを信じることによって救われるというのが、「ほかの福音」です。

パウロは二度、ガラテヤの教会を訪れたようです。最初にパウロがガラテヤの人たちに福音を宣べ伝えたとき、彼らは歓迎して受け入れたそうです。そして二度目の訪問時も、パウロがガラテヤの人たちを、「あなたがたはよく走っていました」と称していました。

しかしパウロという指導者が去ったあと、ガラテヤの信徒は不安になったと思います。パウロが伝えたことは、ただ信仰によってのみ義とされるということです。つまり、どんなおこないをしないといけないとか、どのような掟を守らなければならないとか、そのようなことは何も言われていないのです。

「何もしなくていい」、そう言われたら安心です。でも一方で、「それで大丈夫なのか?」、「何かした方がいいのではないか?」という思いを持つのも当然です。パウロがそばにいたら、そのような疑問にもすぐに答えたことでしょう。今ならすぐに質問することはできます。しかし当時の人たちは不安の中で生きていたに違いありません。

そこに現われたのが、「ほかの福音」を伝える伝道者です。律法を守り、割礼を受けなさい。そう言われて実行すると、「自分は正しいことをした」という思いを持つことができます。その方が安心できるのです。

パウロはそのような「ほかの福音に乗り換えようとしている」人たちに、もう一度キリストの福音を伝えようとしたのです。それがこの手紙なのです。

わたしたちがこの手紙を読む意味は、そこにあります。自分の信仰に自信が持てず、不安に思うとき、信仰が揺らいでいるとき、信仰ってなんだろうと疑問を持つとき、そのときにこの手紙は、わたしたちの心にも福音を届けてくれるのではないのでしょうか。

今回の学びは、これで終わります。次回は8月22日(木)10時30分～で、「導入部 (ガラテヤ1:1～9)」について学んでいきたいと思えます。